

「(1) イエスは目をあげて、金持たちがさいせん箱に献金を投げ入れるのを見られ、(2) また、ある貧しいやもめが、レプタ二つを入れるのを見て(3) 言われた、「よく聞きなさい。あの貧しいやもめはだれよりもたくさん入れたのだ。(4) これらの人たちはみな、ありあまる中から献金を投げ入れたが、あの婦人は、その乏しい中から、持っている生活費全部を入れたからである」。

今朝のこのルカ伝 21 章 1 節以下の御言葉は、聖書の福音書中でも、比較的多くの人々に知られている物語かもしれません。場所はエルサレムの神殿の「異邦人の中庭」と呼ばれる広場でのことでした。主イエスや弟子たちが見ているとき、ちょうど一人の貧しいやもめ(戦争や病気などで夫に先立たれた婦人)がやって来て、レプタ銅貨 2 枚を献げたのでした。それをご覧になった主イエスは弟子たちに、今朝の 3 節以下にありますように「(3) よく聞きなさい。あの貧しいやもめはだれよりもたくさん入れたのだ。(4) これらの人たちはみな、ありあまる中から献金を投げ入れたが、あの婦人は、その乏しい中から、持っている生活費全部を入れたからである」とおっしゃった。物語の流れから致しますと、むしろ単純な出来事であります。

仏教にも「貧者の一灯」という有名な例え話があります。仏前に灯されたたくさんの灯の中で、たった一つだけ、風が吹いても消えない灯があった、それは、村でいちばん貧しいやもめの婦人が献げた灯であった、という話です。これなどと共通点があるように思われるのが今朝のルカ伝 21 章 1 節以下の御言葉なのです。その共通点と申しますのは、貧しい人の献げものであったという点です。貧しい人が献げたものですから、それはたとえ小さなものであっても、大きな献げものなのだという共通項です。いわゆる感動美談になる共通項です。

では、今朝のこのルカ伝の御言葉も、そのような感動美談として理解して良いのでしょうか？。たしかに、主イエスは弟子たちに「(3) よく聞きなさい。あの貧しいやもめはだれよりもたくさん入れたのだ。(4) これらの人たちはみな、ありあまる中から献金を投げ入れたが、あの婦人は、その乏しい中から、持っている生活費全部を入れたからである」とおっしゃいました。これを聴いた弟子たちも、感動したことでしょう。周囲にいた群衆も同様であったでしょう。しかし大切なことは、主イエスはいまここに集まっている私たち一人びとりに、この御言葉を語っておられるのだという事実です。そしてこれは、私たちを悔改めへと導き、真の自由と平安を与え、救いをもたらす、福音の御言葉なのです。

だいぶ以前のこと、私が葉山教会に赴任して間もない 30 年近く前のことですが、私はとてもショックを受けた一つの出来事がありました。それは、当時の葉山教会のあ

る長老が(長老ですよ!)私にこう言ったのです。「イエス様はレプタ2つを献げたやもめを褒めて下さったのですよね。だから献金の額は、なるべく少ないほうが良いのですよね」。この人は本気で、まじめに、そう言っているのかと、疑いましたけれども、残念なことに彼は大真面目でそう言っていました。少なくともこの長老は、今朝のルカ伝21章1節以下の御言葉の意味をぜんぜん理解していない、否、完全に間違っ理解していたと言わざるをえません。

皆さんはどうでしょうか?。むしろこのようなことは、改めて申すまでもないことと思われるかもしれませんが。主イエスがこのやもめの献げものを祝福して下さったのは、レプタ銅貨2枚というその額の多少などではないのです。「献金は少なくて良いのだよ」とおっしゃったのではないのです。そうではなくて、彼女は貧しかったにもかかわらず、その持てる全財産を献げたからです。つまり、この女性にとってレプタ銅貨2枚(今日の金額に換算するならおよそ200円)は、彼女にとって「有り金の全て」だったのです。彼女はその「有り金の全て」を献げることによって、彼女自身の生活の全てを主なる神に献げたのです。だからこそ主イエスは今朝の3節において「(3)よく聞きなさい。あの貧しいやもめはだれよりもたくさん入れたのだ。(4)これらの人たちはみな、ありあまる中から献金を投げ入れたが、あの婦人は、その乏しい中から、持っている生活費全部を入れたからである」とおっしゃったのです。

そこで、この4節の「持っている生活費全部」という言葉を、昔の文語訳聖書では「生命の科をことごとく」と訳しています。これは口語訳の「生活費全部」というより遥かに優れた訳だと私は思います。なぜなら「生活費全部」は単純にお金のことだけをさしていますが「生命の科をことごとく」というのは、単にお金のことだけではなく、このやもめの婦人の生活の全てをあらわす言葉だからです。さらに言うなら「生命の科をことごとく」とは、私たちの全生活、全存在、それこそ生命活動の全体、つまり信仰生活の全てをさしているからです。

今朝の御言葉の1節に「さいせん箱」という、聖書では珍しい言葉が出てきます。これは、当時のエルサレム神殿の「異邦人の中庭」に12個ならべて置かれていた、ラッパのような形をした献金箱(献金筒)のことです。それは金属で造られていましたから、そして当時のお金はみんなコインでしたから、たくさんのコインを(金貨や銀貨を)投げ入れたなら、それこそ華やかで賑やかな「ジャランジャラン」という音がしたことでした。しかし、このやもめの婦人の献げものはレプタ銅貨2枚でしたから、ほとんど音などしなかったのです。見ていた人たちも失笑したかもしれない。それを主イエスをご覧になって、いや、このやもめの婦人こそ、ほかの誰よりもたくさん献げものをしたのだと言われたのです。なぜなら、彼女こそは「生命の科をことごとく」献げたからです。

私たちはどうでしょうか?。私たちは、献金も含めて、このやもめの婦人のように「生命の科をことごとく」献げる信仰生活をしているのでしょうか?。それこそ、献金

の金額の問題ではないのです。大切なことは、ここに集うている私たち一人ひとりが、いま、そしていつも、このやもめの婦人にとってのレプタ銅貨2枚と同じような献げものを行っているかどうかという問題なのです。人がどう見るかではありません。華やかで賑やかな音がするかどうかという問題ではないのです。そうではなくて、私たち一人ひとりの献金も含めての全ての献げものか、いつも「生命の科をことごとく」になっているかどうかということが大切なのです。